



2015～16 年度
国際ロータリー会長
K. R. ラビンドラン

Weekly Report Niigata



世界へのプレゼントになろう

2015～16 年度 国際ロータリーのテーマ



2015～16 年度
新潟ロータリークラブ会長
竹石 松次

新潟 RC6月第 3例会 (2016.6.21) No.3139

(1) ロータリーソング「我らの生業」斉唱

(2) 竹石 松次 会長挨拶

宮田亮平

昭和二十年 (1945～)

蠟型鑄金作家二代目宮田藍堂の三男として、佐渡市真野 (旧・佐渡郡真野町) で生まれた。

生まれながらの芸術家で、金属加工の蠟型集金は、松ヤニと蜜蝋で原型を作り、その原型に土を付けて焼き、中の蠟が溶けた空洞に銅や銀といった金属を流し込み、固まった段階で、ハンマーで土を除き金属を取り出し、磨いて仕上げる。

宮田の父・二代藍堂が飴のような蜜蝋をまるで魔術師のように操り、見返り猫を作る姿を取材した時には、千数百年の昔から伝わる工芸作家の妙技に驚かされた。

金工といった伝統工芸の家に育った宮田は、少年時代は、七人兄弟の中で絵画や書など芸術的感覚は極めて弱かったという。

家の作業場の裏が真野湾で、小、中、高校を過ごす、まさか自分が芸術の道に進むことなど眼中になく、動物が好きだったことから獣医かヘアーデザイナーに憧れていた。

佐渡高校を卒業すると、親や兄弟から独立、さらには、兄や姉との比較対象の苦痛から逃避したい気持ちから上京を決意する。

両津港から佐渡汽船に乗船、寒風が吹き寄せる甲板で海上を見つめていると、波間から姿を見せるイルカが並走して泳いでいる珍しい姿に遭遇した。佐渡の金北山が白い雪を頂き、住み慣れたふるさとを後にする十八歳の受験生にとって、寒さと強風に一抹の不安を抱えての脱出場面であった。東京へ唯一見送ってくれたこの時の日本海のイルカが、後日作品のテーマとして誕生するとは夢想だになかった。

東京芸術大学への挑戦は、三度目の正直で合格、やはり美術学部工芸科に入り、金属、鍛金、鉄を叩いて形成する工芸の世界に踏み入れた。そこには、伝統的な工芸一家で育った血筋が底流に流れていたことは否定できない。

大学では、芸術と社会との関係、七十年安保闘争の時代、将来の日本を考える学生運動全盛の時代でもあり、否応な

しに社会人としての意識改革に青春の熱を燃やした。

金属の作品も抽象的な作品が主流で、学園の作業室で叩き続けた。

鍛金について宮田は、

「当て金と金槌、その間にある金属、そこに介在する阿吽の呼吸、雄雌、陰陽のバランスから生まれる緊張感が魅力だ」

と語っている。

頭脳で描いたイメージを、ハンマーで叩く、その打った軌跡が強弱を繰り返すことによって次第に形となる根気のある作業が鍛金である。

叩き具合によって丸みを帯びたり、門が形成される。そして、ツルツルに仕上がって行く。この時の作業では、偶然性の範囲は極めて少なく、打ち手の感覚がそのまま反映され、世界で唯一の作品となる。

大学では、大学院で鍛金を専攻、終了した後、平成二年 (1990)、文部省の在外研究員としてドイツ・ハンブルグに留学する。

工芸美術博物館で一年間研究する機会があったが、ここで日本の室町、鎌倉、江戸の浮世絵、刀剣、漆器類が収蔵されていた。放置され汚れていた金属作品を補修する際に、我が国独特の工法である梅酢や大根おろし、米ぬか、藁パイ、といった材料を使って復元、修復を行った。ぴかぴかに仕上げられた作品を見た学芸員は、その技術力に驚きの声を上げた。

日本から来た『若造』と余り注目されなかった留学生は、一躍注目され、尊敬される存在となった。伝統技術や金属加工の磨きの技法は、日本の「食」と共に世界に誇れる技術を実感した。

我が国の工芸技術文化を再認識して帰国した後、先達の物真似ではなく、独自のテーマが将来を決めるという確信が強まった。

宮田は、かつて佐渡を後にした時、見送ってくれたイルカを創作のテーマにする決断をする。—シュプリングエン—誕生の瞬間である。

平成九年 (1997)、東京芸術大学教授に就任多くの人材を育てる、教育者としての活動も本格化した。

シュプリングンの制作も本格化し、二年後の平成十一年、東京のギャラリー日鉦で開催された初の個展では、波間に漂うイルカ、太陽と一体になる「日輪」、その中で泳ぐイルカ、多くのイルカを会場一杯に泳がせ、そこに和楽器の鼓を着物姿の奏者が奏でると、静寂の中を泳ぐイルカの息遣いが聞こえてくるような海が出現した。「きょうのひをいるかと友にすごし 今日の日も金物とともに我歩む」

イルカに掛ける宮田の創作は、イルカを友とした瞬間対話が始まる。

平成十九年（2007）、日本現代工芸美術展でグランプリの内閣総理大臣賞を受賞、平成二十四年、日本芸術院賞等多くの賞を受賞している。

新潟放送六十周年、新潟日報社七十周年の記念事業である美術展、「ふるさと燦燦・育まれた作家たち展」が、新潟市美術館で開催され、筆者との公開対談で、

「日本芸術院賞受賞は、一つの型を認めて頂いた。佐渡で見送ってくれたふるさとのイルカに感謝している。これから、文化と産業をもっと結びつける努力を続けたい。」

と話してくれた。

東京芸術大学学長を二期勤め、日中韓の文化活動の先頭に立っているほか、文化財審議会会長、横綱審議会委員など多くの役職の傍ら金属との挑戦を続けている。

佐渡金銀山の世界遺産登録を目指す支援のテレビ番組で、佐渡の慶長小判復元に、佐渡高校の生徒と一緒に汗を流す姿に地元の支援者も拍手を送っている。

娘の金工作家、琴との二人三脚の個展を新潟で開催するなど、蠟型鑄金の血は脈々と継承されている。

学長室の壁には、会津八一の「学規」が飾られている

「学芸を以って性をやしなうべし」

今年4月、文化庁長官に就任した。

(7) ニコニコボックス紹介

・馬場 伸行君(新潟西 RC)次年度ガバナー補佐を拝命した馬場です。宜しくお願いします。

・宇尾野 隆君 次年度第二分区ガバナー補佐 馬場伸行さんをお迎えして。

・中野忠浩君、後藤信彦君、山崎儀信君 分水ロータリークラブから3人で来ました。本日より宜しくお願いします。

・山田 眞君 新潟日報メディアシップカップ優勝したことにニコニコします。

・白勢 仁士君 一年間、ニコニコボックスのご寄附有難うございました。新年度は青少年育成基金のご寄附も宜しくお願いします。

(8) 卓話「泥に塗れて」

人間国宝 陶芸家 伊藤赤水 氏



(9) 6月21日例会の出席率 75.00%

会員数98名（出席免除会員 9名）

出席者69名（出席免除会員4名を含む）

(2週間前メーク後 87.63%)

7月5日の例会予定

「事業計画の発表」

新潟ロータリークラブホームページアドレス

<http://www.niigatarc.jp/>

(3) 新潟青陵大学ボランティアセンター 大倉瑞希さん紹介・挨拶（本間彊青少年奉仕委員長紹介）

(4) 竹石会長より新潟青陵大学ボランティアセンターへ青少年育成基金贈呈

(5) ビジターの紹介

・馬場伸行次年度ガバナー補佐

馬場ガバナー補佐ご挨拶

・分水ロータリークラブ

中野忠浩君、後藤信彦君、山崎儀信君

(6) 各種ご寄付の発表

ロータリー財団寄付（若槻 良宏委員）

若槻 良宏君

米山奨学会寄付発表（小林 敬直委員長）

小林 敬直君

青少年育成基金寄付発表（小林 悟委員長）

本間 彊君 小林 悟君